

で行だやらの十七文字にて、十萬億土の兒を思ふ心を
届かせたり。我は其が十分一にも足らぬ處へ行きし人
の上を思ふに、幾百の文字を連ねるもいひあらはされ
ぬ笑止さに、かゝる折しも兼て俳句の嗜なみなあら
むにはなと思ふこそ我さへをかしと思ふなりかし。
◎冬の寒きと、夏の暑きと何れか凌ぎよきと心に問へ
ば冬には暑き方忍びよしといひ、夏には寒き方まだし
もといふなるべし。
◎憂しつらしと思ふ事も、過去りし事は何とやらむ輕
く覺えて、今のつらさには争でかはなんと思ふは、人
の心の常なんなり。されど人のしと思はむは詮なし、
我をして左あらせじとするには、其時々思ふ心の程
を記しおきて、後の日に至りかくまでにくるしき事は
よもあらじなと思はむ折、曩きの日の記録より出でう
ちながめたらむには、實にかゝる事もありけりと思ひ
くらべて、切迫したる心も少しは打寛ぐ事あるべし。
彼「ながらば又此頃や」の古歌は、心地死ぬべく思ひ
煩ひたる折なにと、返すくも打誦すべきものぞか
し。されば又たのしき事、うれしき事は如何にといふ
に、是は兎角に春は花、秋は月にて、其折につけつゝ
移り行くぞ人の心の習ひなるを忘れぬぞよき。何につ

けても、かゝる嬉しき事はあらじ、かゝる苦しき事は
よもなんど、思ふは人の常なれど、此二ツの心をだに
忘れずば、悲しみに過ぎず、樂しみに惑はず、いつも
程よく感情を制して心の中心を失はぬ事なるべし。
◎憂しつらしといふ事、我心にもまか思ひ、人にも其
はしつゝほのめかして、同情を得むと思ふ程こそ、ま
だしも其間に少しの餘裕はあるなれ。憂きもつらきも、
其極みに至りては、我心にもまか思ふ氣力だになく、
況してや之れを人に語りて、假令其同情を得たりとて、
迎も我胸のうき雲拂ひ果すべきことならざんどうん
じ果つ、身をも心をも、其成行にのみ打任せ、我身を
人のものに成して、生けりとも、死せりとも思はず、
積らば積れ、憂のかずくゝに、何處まで堪へむ我身ぞ
なんど、思ひあきらめたらむ程こそ、なか／＼につら
き事の極みなんめり。其をしも、志弱きなり、自暴自
棄なりなんといふ人は、かゝる境に身を置きたる事な
き人ならむなどかこつも、是亦強て人の同情を求めむ
とする我愚痴にや。
◎世の中を渡りくらべて今ぞ知る、阿波の鳴戸に波風
もなしてふ古歌こそ、我年の一年々々積るにつけてこ
そ、いよいよ深く其意味は、味はるゝなれ。渡りつゝ行

く世の中、さまざまの人に接するも、己が年長けぬ裡
は、人の兎思はむかくや思はむなんといふ事は夢にも
心にかけず、眞しや己が事を兎や角噂する人の言なん
ど聞たりとて、蚤蚊に刺れたるほどの心に感せず、い
ふ人は何となり共いへよかし、我には我心の据ゑ場あ
り、知らざる人の何といはんも、我心だに疚
しき事なくば夫れにて事は足れりなんと思ひ
しこそ、今はた之れを思へば、かへすくも
そいふなりし事なりけれ。やはり人は、成る
べく人に悪しくいはれぬやう、思は
れぬやうはた誤解されぬやうになす
こそ、波風暴き浮世を渡
るに賢き術ならめ。左は
いへ、かくせば人の兎や
いはむ、かくや思はむな
ど、一ツ／＼に後を顧みては、容易く我思はむ方に、
至り付きぬべき餘地なきに似たれど、其は我主義目的
どか、或は又公共の事の爲に、身を擲ちて何事をかな
さむとする、場合に限りての取り除けなり。常々の身
の行ひ、私の交なんどは、假令道理上あしき事なら
ずとも、矢張人の如何しく思ふ事はなさぬこそ賢きわ



となりてふとを、後れ馳せながら此頃覺りぬ。これは事
新らしくいひ出む程の事にてはあらねど、誰しも年若
く血氣盛んなる頃は、随て自信強く（眞の自信といふ
べきものにはあらぬも、人のうるさく、むつかしきも
のなるを知らぬが爲に強き自信）我主義目的といふ
べき程にあらぬ事にまでも、我流義をば
押し通さむとして、いつしか多くの批難
を身に負ふをも、心にかけず、過行く年
月のつもり／＼とて、遂には我ゆくての妨
げとなりしに心付き、及ばぬ悔に身を責
むる事のかず／＼、一年一年積るにつけて、
思ひ出るまゝに、今より後の我戒めにも
とて書き付けぬ。

主婦となりし女學生の経験

(上) 若松 賤子

御尋ねの件甚だ疎漏ながら心覺えの廉々のみ左に
御答いたしし御笑覽被下上女子教育てふ大經綸
に對し草の枝折の片われどもして御用ゐ被下上は

ば少女のさちこれに超ゆるもの無之。
婚後已に満五年、必ずしも長き年月には無之。いへども、少女が數にもあらぬ小生涯の中、何づれの點より考ふるも決して等閑ならぬ時期と覺認いたし。人の生涯を假りに襪襪時期、修學時期、執務時期と定め、第一期は第二期の準備とし、第二期は第三期の準備として、さて又在世時期を擧げて未來永遠の生長發達の準備と見做し、いへば、少女が婚後五年は即ち其三期、人生行路の修養彌よ重く彌よ密に彌よ面白く相成り時かと考へ申し。されば人に後れて、卒業後もゆる／＼學校に滞在いたし、日頃既にホームを造り、家族に於ける主婦として最も貴く重く責任も希望も充ち満ちたる位置を占め玉ふ少女の先輩等が、まことしやかに「あなた方が一番御羨し」とか「私どもの様に世話女房が何の益を致しませう」とか、「學校に居る間が花だ」とか、一私どもの様に引込んで智識も何もかも退歩する計り」とか、啣たれて、恰も此第三期が人世發達の蟄居時代の如く申されし事は、眞の空言にて、當座の愛嬌を振まかれし事と、今更悟り申し。ホームは婦人に新天地を開らきい

事、教課書にこそよらね、ホームに於ける教育發達は、萬々學校教育に劣らぬ事、進歩退歩さへ、一々認め得らるべきことなど、少女が五年間の經驗に徴して確かに信じし事に御座し。元より在校時期は、在校時期特有の利益あり、特權あり、歡樂有之いて、一度書生たりし人は誰も決して忘れ得ざることを考へ。少女などはとても／＼忘るることには無い。さりて、マーテンフッドの小流れたゆたひつゝも、一旦ウィマンフッドの大流に合ひて、これに和し上は、如何で元の小流れに立歸らんことを希ふ可き。其岸には薑菜たんなりし事も、筏を流し眞帆片帆浮ぶるとの雄壯なるに争で及びはらん！
美術もよく、歴史も面白くいが、ヒューマニティーの大問題を彌よ近く、彌よ親しく、研究するとの、高尚なる面白味の勝れるには如すと存し。
ほだしなく責任なき自由なる身の逍遙、父の保護母の慈愛必ず愉快なるには相違あるまじ。左りとて一個の主婦となりて、ホームの樂園を管轄修理し、妻たり母たるの最も品位高き義務を遂げ行く

こと、愉快も亦一段の進歩を加へたるものにははんと被存し。
まことや

振り分け髪の際に母を失ひ、養母は俗にいふ腹痛めたることなき婦人といひ、遂に慈母が恩愛の味はひを知らず生立ひもの

から、身は人生教育の最大要素を欠きたる不幸ものに

てい。尤も暫時にして其手をも離れ、さる宗教學校の恩庇を受け、十數年一日の如く、師の撫育を辱う

せしことにて、我が生れし時代と、置かれし境遇とに對して

考がふる時は、此の時與へられたるものに増したるホームはなく、恩愛深かき師に

越えたるフオスタ、ペレンツなしと固く信じ、感謝の念さへ意りなく養ひ居りしことなるが、

さりとて、孵卵器に生立し雛鳥は、母鶏のはがひに温まりしものに比して何となく、物足らぬ處有之い如く、學校教育は、宗教觀念に、文學思想に



最も重やかにして他に得られぬ特色ありて、此等の器械には不完全なしとするも、天然が備へし手術に全然代はるること六か敷と存し。それかあらぬか、人生常數の半を過しし迄も、自分の人情と云ふと

に疎かりし度合、顧みて長歎息の外侍らず。凡そ生るゝといひ、死するといひ、疾むといひ癒ゆるといひ、得失、盛衰、浮沈、人世普通の出来事

事に對し、自分の心の動かざりしことと、同情の伴はざりしと、目にし耳に

するも、一切冷淡無頓着なりしこと、我ながら鈍ま敷覺えし。師の君の心を籠めて、日夜に説き聞かされし大

慈、大悲の偉生涯、最も高き人情の模範にとて天より賜はりし彼の人の

記録は何と承はりしものか。レ、ミゼラブルはたよく出来た小説とのみ思ひしが、どこまで浮薄でありしかと耻かしくも口惜しく存し。今日に至りては存不申、只以前青しとのみ思ひ解めし西瓜の中身をまことに錐で穿ちたる程窺ひ知たりといふま

でいて。宗教のことは敢て申に不及、此邊教科書外の教育として有力、有功の器械となるべくは、稗史、小説にては、青年男女の嗜好なみくならず、こゝに集まるものゆゑ、教導者たる方々は一層此點に御注意下され、有益無害なるもの、選擇、并に通讀中着眼すべき廉々を存分御心添へ頂きたい、讀者將來の爲め如何ばかりの幸ならんと考へ申し。其他時々社會に現はれ、活小説とも唱ふ可き著るしき事變並びに近く目撃したし個人の小事變、たとへば、同窓の失敗、隣家の罹災など、一々折を外さず、薫陶の材料に用ゐられは、女學生通俗の人情に疎といふ議もさまでにはあらざる可きかと被存い。此外、近來發明、漸々會得の道に進み、一の真理は

人生の九分九厘は俗事より成立つといふことにて。仕來り、舊習と申すものは大概夥多の人が多年經驗し來りし處の結果にして、或場合に於ては、容易ならぬ熟考を経て傳はり來たりしものなりといふことは、始めて家を持たる女學生の中々に思ひ當らぬ處に候、妾が新たに組

立つるホームこそは新理想を基とすべし、新鑄型に推出さる可からずとは、頗りに其腦裏に増長、跋扈する熱望にて待らんかし。これより改良策を案ずると共に先づ、第一着に舊習はせを毀ち、固有の法式を無みしものから、家のものは勿論、朋友親戚まで非常の不満を懷かす様相成り、往々見受るためしに。古き風俗の面白からざる原因は重なり、外形の法式のみに拘泥して、精神を失なひたる所以に有之。間、有しかたは其儘に廢せたい無かる可らざる要素を之に加はへは、い、甚だ穩當にして成功し易きのみか、眞の改良の精神にも適ひはんかと存い。固より從來の仕來りの中、全然改むべき廉も少なからず有之はん故、採り除けばなしとせずいへども。

誠實を加へよ、儀式は省く可らずとは一通り無事の規則と考へ候。例へば新年の挨拶、寒暑の訪問にても、心の誠實を擔ひいものとせば。

値は僅か二錢にして無量の贈物。と相成りはん。其の他重の内の遣りとり。小供老人を悦ばすべき手土産など決して無益の煩勞なら

ず、又偽りの儀式にもあらずとのなどは、近ごろやうやく悟りたる真理にてい。

石州茶の湯 (二) 半政庵



と靜に相見心は少も油斷なき様肝要なり乍去餘り大事過ぎ或は粗忽或は拍子或はリキミ或はハヅミ杯ある可からず勿論慢心又は臆するとは甚惡しと故に心を丹田に押入れ散亂せぬ様如何にも慎重を加べきとなれど其座に著き面色常ならぬ様ある可からず小學に曰く顔色整齊、中心必式ありと善哉此言や昔し柳生但馬守は千宗旦に點茶を乞ひ頼て剣を取り身構へて宗旦を目掛打

たんとせしし一點の打コムベき所なく其妙技に感孚せりと云ふ休巴曰く茶立前に掛り心、眼業の三ッ揃はざれば總肺出來ざるもの也我流儀の居坐を正して肩張らざるも腰屈めず腋下は手掬を挿みし如く掌中は雞卵を握たる様に體を繕り馴すも要する所宗旦、怡溪の心持あらん爲なり。

◎小座敷書院床前に卓、香爐、置物等飾付け軸物を釘に懸けると并に掛物卷簾等本流は順序立置けり世間茶家にして此邊を辨へず尙且つ小笠原流を見習あり又花を入るゝに花道家ならでは學び難き思ひせり相阿彌君臺觀左右記に立花の由來を説き元と茶儀に用ゐたるを後其挿み様まで相改め花道の弄びものになれりと云ひしが今日とても茶を藝古せんには自然花の扱ひ心得ぬ筈なし我流儀に於て懷石する時初座、陰に飾り後座、陽に作し花を以て軸物に代ふる例あるより花の入れ方心得ぬことなし。

◎茶席に萬事ども從容たる譯なり角張たるは茶の本義に非ず怡溪翁曰く茶點る内は一向雜念なく業は緩々に

茶の湯にありと今其稽古の順序を言は平手前、長飯爐、風爐、九段、丸卓、旅簾等其外の棚物何も濃、薄兩茶扱ひ長緒の結方大概を心得、進んで別會物となれば唐物扱ひひより天目の扱ひ又は九と角の盆立、中次棗、扱ひ等初後兩傳に分ちあり此上臺子眞行草とも傳授し遂に皆